

bleach世界に転生して修行して藍染とYHVHボコボコにした後ってする事なくね？

餡掛けペン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なろう主人公バリな死に方をした獅子村大蔵。例によつて転生したがその先は剣あり魔法ありのファンタジー世界でもダンジョンが立ち並ぶ並行世界の日本でもなく、なんとbleach世界のソウルソサエティだつた！なんやかんやあつて藍染とYHVH打倒を目指す事になり、力を隠しそそこの地位に居座りながら最強になるために日々修行漬けの日々を送る。無事理不尽大王二人に勝ちより良い未来を掴むことができるのか！？

…ところで、ボス二人倒したらその後何すりやいいの？

目

次

此処どこや
靈力が無エ!!?
餅、美味かつたぜ

12 5 1

此処どこや

突如、背中にとてつもない衝撃が走る。何処からか液体が体内に流れ込む様な感覺に襲われる。息をしようとえずくも空しく、次にもがこうとしたが体に力が入らない。体のあちこちが痛い。訳もわからず只耐えていると、体が何がを搔き分け、下に沈む感覺に気づく。まるで海に身を投げ、重力と水圧の成すがまま海底に沈みゆくようだ。一体何がどうなつて：

目にも力が入らず、しかし半開きになつていた事に気づくと辛うじて視界の端に入る光に集中した。

すると映つたのは、横たわる景色とその地の上に立つてこちらに向けて何かを訴える女子高生。なんだ？何を言つて：

そう問い合わせようとして開いた口から、何がが吹き出す。女子高生の顔が絶望に染まる。

なんだ、これは…。

そして僅かな視界すらも真っ赤に染まり使い物にならなくなる。集まつた断片的な情報が、微妙に最悪な状況を仄めかす。そして…思い出す。

…そうだ。俺は確か：

日没近くの帰り道。獅子村台蔵は仕事の疲れを持つて自転車を漕いでいた。冷蔵庫の中に何かあつたかな？夕ご飯何にしようかな？などと考えていると、進行方向の十字路の向こう側で信号待ちをする女子高生が見えた。黒髪ロングで胸は中々大きい、顔は…うーん、微妙に遠くて見えない…。

そんなアホなことを考えながら横断歩道の少し前まで来た。信号待ちのためにブレーキをしようとしたが、丁度よく信号が青になつたのでそのまま進むのとにした。

台蔵よりも向かい側の女子高生が先に道路に踏み出す。顔が先ほどよりも鮮明になる。

…微妙だ。

そんな失礼極まりないことを思うと同時に自転車の前輪が道路に乗り出す。彼は視界に動く影を見つけ、なんと無しにその全貌を捉えんと横を見ると同時に：

大型トラックがクラクションを鳴らし、彼ら二人に突っ込んだ。

「！」

信号が赤であるにもかかわらず、スピードを落とさずに突進してくる大型トラックに、音だけでなく目でも捉えた台蔵の方が女子高生よりも一瞬早く事態を飲み込むことができた。そして彼は思った。

すぐにブレーキを踏んで後ろに下がればまだ間に合う！？

そうすればまだ間に合う。自転車を放り出して、走るでなく飛び込むようにして歩道に入る。危機に陥ることで極限までフル回転した頭が明確に描いた道筋。この通りにすればまだ間に合う。だから早く行動に移せ。ブレーキを踏め。そう、台蔵の本能が最大級の警鐘を鳴らした。なのに、ブレーキに掛けた指は力を込めなかつた。

あの女子高生はどうなる？

高速回転する頭の隅に溜まる雑念が、神経を通らんとする電気信号の妨げになっていた。

この一瞬の葛藤に時間を割き、女子高生は音の正体に驚愕の表情を浮かべトラックと自転車は少し前に進んだ。

進んでしまつた。

もう間に合わない。

ええい、ままよ！

台蔵はブレーキを踏まずに女子高生側へと自転車を横に倒すと慣性で前進し、更に走り勢いを加速させ、全体重を載せ女子高生にタックルをかました。そのまま女子高生と一緒に向かい側の歩道へと飛び込む算段だつた。女子高生が勢いよく吹き飛び…

：彼女は、辛うじて助かつたわけ、か。

タックル時の失速が大きかつたのだろうか。彼女と自分にできた大きな隙間が、俺たちの結末をより明確なものにした。タックルではなく飛びつき腰に手を回そうもんなら、女子高生もまたそこら辺に転

げ回ったことだろう。

だからこれでいいのだ。これで…

いいわけねえだろクソボケがツツ!!?

何なろう主人公みてえなことかましてんだアホンダラ!!? まじ死んじまうよこれどうしたらいいやどうしようもねえよ身じろぎ一つできねえんだもんよ息も止まつてるし救急車来るまで持たねえだろこれだつて血こんなに漏らしてんだもんこれ絶対スマホで野次馬に取られてるよね見せもんじやねえぞ人の死に際なんてある意味性行為よりもデリケートな所業だぞこの世で一番エロいんだぞスペチャされたら俺に寄越せよ

前進打撲、複雑骨折、出血多量。死に際も死に際、とうとう正常な判断ができなくなつた太蔵。支離滅裂な思考がグルグルと回る。救急車は間に合わずとうとう御迎えがやつてきた様だ。

アア～～だんだん意識が遠のいていく～～え？ まじ死ぬのこれ？ 新作のゲームとか v t u b e r の追つかけとか b l e a c h の千年決戦編のアニメ視聴とかおにやのこと童卒パンパンとかまだ人生でやりたいことあつたのに…これしかねえのか…このまま死ぬなんなら例に倣つて転生とかしねえかな…これだけならう主人公の道に沿つてるんだから転生しないと詐欺だろ…ただの交通事故に期待してんだか…そう都合よく転生してチート貰つて無双してハーレム作つて豪遊生活とかあるわけ～

自瀬の句を思い認める途中、五十嵐太蔵は唐突に息を引き取つた。

暗闇。光も届かぬ漆黒の、それでいて心のそこまで凍てつくような冷たい、まるで深海の奥深く。気力が削がれ、何処か懷かしさを覚える虚無を植え付ける圧力に屈し、只々押されるがまま果てしなく沈んでいく。突如、激流に襲われる感覚に遭う。荒れ狂うでなく、誰かの意思があるかの様に一方向へ向けて自分の背中を押す。進めば進むほど意識と五感が明確になつていき、また暫くするとうつすらと一筋の光が目に映る。その光に向かつて進めば何かが変わる。そんな予感があつた。それはこの状況も自分の状態も、何もかもがはつきりし

ないことに対する不安を搔き消すものではなく、そこに向かえば全てが好転する、そんな希望のものだつた。だんだん強くなるその光に、居ても立つても居られず手を伸ばす。すると突然光が弾けると共に、水中から放り出されたかの様な浮遊感に襲われ…

「…んあつ？」

目が覚める。倦怠感と湿気、高温に気づくと居心地を悪くし、それらを押し退ける様に飛び上がつた。

「嫌な夢だつたな…」

悪環境の部屋から逃げるため、暖簾を搔き退け外に出た。

「ンーッ！」

大きく伸びをすると、額に手をやり空を見上げた。

「いい天気だなあ」

はて、俺にこんな健康的な習慣があつたかな？疑問に思いながら周りを見渡す。目に映つたのは一様にボロボロは服を着る人々。下敷きの上でうずくまる人や寝る人、棍棒を肩に掛け周りを威嚇するように闊歩する人、何かしらの店主。さまざまな行動を起こす人々だが、生産的な行動をとる人は少ない。次にボロボロな家屋。少し衝撃を与えれば最も簡単に倒壊しそうなほど簡素で低質なボロ屋の数々。逆にそれ以外見当たらない。次に整備されていない道。何かしらを盗んで逃げ回る子供に追いかけるお爺さん。

「…何処だ此処はああああああああ！」

斯くして、獅子村大蔵の転生道は！幕を開ける！！

靈力が無エ!!?

「待てやオラアアつ!!」

「こんのクソガキがあ！どつき回したるわア！」

「ぬおおおおおおおお!!!!」

俺は今、幕末版ヒヤツハー連中から死ぬ氣で逃走を図っている。鉈を持ったハゲチャビンに刀を腰に刺すチヨンマゲ、死神の鎌の様な武器を持った痩せ細つた浮浪者。いや、全員浮浪者か。足を止めれば確実にミンチだろう。なぜこんな目に遭っているのか。これには深い事情がある。

此処はどこか。何故自分はこんな所にいるのか。誘拐？よく見れば周囲の人と同じような服装を自分もしている。誰かに着替えさせられたのだろうか。今は何時だ？今日も仕事があるので、早く帰りたいのだが。こう言う時は警察か？

こう言う時も仕事を考えるのは人の性だろうか。俺はグルグルと頭を回転させ、一つの結論に行き着いた。

そうだ。人に聞こう！

現地の人に聞けば警察所への道筋くらい教えてもらえるだろう。あるいはこの訛ワカメな状況に陥つての自分に情けをかけて食事の提供や車での運搬をしてくれるかもしれない。古今東西、人は有事の際はこうやって助け合つて人間という種は生きながらえて来たのだから。つてよく飲みにいく酒場の常連が金足りねえ時に小銭せびる時いつもそう言つてたから間違いねエ！よし聞こう！

いきなり右も左も分からぬ状況に陥り、眠気は吹つ飛んでも混乱は消えなかつたようで。

「こんにちはあ！いい天氣ですね!!ちょっと道を尋ねたいんですけど…」

鉈なり刀なり棍棒なりを持つた浮浪者に話しかけるという無謀を冒したのである。

「…ナンダア？テメエ…」

「え？いや、その…アハハ」

「アハハじや無エ！舐めてんのかグルアアつ!!」
「細切れにしてやラア！そこ動くなあ！」

「テメエの肝焼いて食つてやるア!!？」

「ヒイイイイイイイイ!!」

そうすれば当然こうなる。

いやこうはならんだろうおおおおおお

!!何で!?俺話しかけただけじやん！愛想笑いしただけじやん！それでこんな殺意剥き出しで殺しにかかるとか誰も想像できねえだろ！っていうか一人肝を食うつて言つてたぞ！わかつたこころ辺の連中はカニバリズムの一族で俺を誘拐して食糧にしようとしてるんだ！きっとそうだ！このクソツタレめが！っていうか鉈とか刀とか色々こさえて徘徊してたもんな！最初から危ないやつだつて自己主張してたもんな！そりや話しかければ武器の一つ振つて襲つて来るよな！絡んじやいけねえ連中だつて見りや分かるのに何で話しかけた俺のバカ！

「待てやオラアツ!!？」

「スイマセン！スイマセン！許してつかあさああああい!!!」

その後、何とか人喰い連中を撒いたはいいが、安全地帯や情報を求め歩き出すと、今度はメンチを切られただの肩がぶつかつただので、いく先々で殺され掛ける。俺まず見てないし肩もぶつかりようがない程距離あつたのに。あんまりだ。夜はそこらへんで地べたに横になつて連中に混ざつて寝た。朝になつて歩き出せば即鬼ごっこ、夜は野宿を繰り返した。そんなこんなで早3日。今日も今日とて追いかけられている途中である。

「フツ！フツ！フツ！フツ！」

だが、3日も同じ事を繰り返すと流石に慣れてくる。3日間も奴らから逃げ果せた実績も相まって、今や陸上走者並の走り（気分だけ）を

見せる程だ。回を重ねることに足が早くなると、自然と奴らも追い付かねえと諦めるタイミングも早くなり、今は歩きながら考える時間が増え、余裕が出来た。そして奴らの回避方法も見つけた。出来るだけ端を歩き、背中を丸め、顔を地面に向けるのだ。あまりやりすぎると逆に目立つて刺激してしまうので程よく、だ。気が立つて奴が向かい側からやつて来れば、そこらの角を曲がり、蹲つてる連中に混ざることで難を逃れる。この二つの方法を編み出し実行に移すと、何と絡まれ率が明らかに減った。こんな短期間で神業を編み出す俺は天才だと思つた。移動中にあまりにもタイミング悪く遭遇した場合だけ追いかけられるが、体感日に2回といったペースであり、俺の移動は随分と楽になつた。

運が良ければ今日はこれがラストかなっ！

今行く道の突き当たりを右に曲がり、すぐの角を左に曲がり、しばらく走つてから後ろを見ると…

「へつ、どんなもんだ！」

奴らは諦めたようだ。息を整えながら道なりに真っ直ぐ進む。

さてこの三日間、考えたのは浮浪者共の回避方法だけではない。この先どうすればいいか。方針もバツチリ考えてある。それは「会話ができる奴にあうままでひたすら一方向に向かう」だ。

まずこの地に留まるのは論外。無法地帯が過ぎる。人の居ない家屋に数軒忍び込んで電話を探してみたものの、ここら一体の時代感に習つて電子機器も皆無らしい。今どきスマホも持つてねえとかこいつら田舎もんだな。：なのでまずはこの世紀末張りに無法地帯な場所から逃げる事を念頭に置いてこの方針を立てた。

周りにアンテナを張り巡らせ、慎重に歩を進める。

：正直言つて、俺はタイムスリップでもしたのではないからとバカ真面目に考えている。ここに来る前の最後の記憶。なろう主人公張りの死の方をした。あれがマジで、それがキッカケでタイムスリップをした。馬鹿らしいとは思いつつも、自分の中では有力な説になつていい。あるいは節度のないテレビ局か何かが、許可なく一般人の俺を誘拐し、眠つてる俺に電波か何か送り、死んだ夢を見せ、この広大な地

に幕末張りの家屋や人をセットし、俺を放り込んで起きた俺の反応を収録してる。そんな壮大なドッキリと言われた方がまだ現実味があるが？？あるいはこの世界こそがVRで今もなおヘッドギアを装着：「お！」

「なんだこのオツサンは！？どつから現れた！？」

「な、何だよ。やろうつてのかオツサン」

相手になつてやるぜ。どつちの足が先に悲鳴を上げるかな？よいドン!!？（食い気味）

「79地区の連中が何しにやつて來た。こつちは74地区だぞ。さつきと自分の山に帰りな」

…へ？

「ち、地区、とは？」

「…なんだ新参者か。まあ、草鹿に行き着く様な奴だ。どうせ生前に口クな行いをしてこなかつたんだろうな。そのままJターンして帰るといい。この先はお前さんらには苟が重過ぎる。」

「…た」

「？」

「助かつたああああああツ!!？」

「フンッ！」

「ゴケツ!!？」

…な、

「何すんだよいきなり、オツサン！」

「何するんだはコツチのセリフだ！いきなり襲いかかつて来やがつて！やる氣かグラアツ!!？」

「お、襲つてねえよ！俺に中年のオツサンなんかを抱く趣味は無エ！人聞きの悪いこと言わねえでくれよ！」

「嘘つけえ！テメエの目は明らかに俺の穴を狙つてやがつた！今まで何人もの中年を襲つてきた歴戦の獣のソレだ！正体を表せ！」

「あるえええええ！ちよこつとボケたら思いの外乗つてきて混沌と化

したあ!?」

た、ただモンジやねえなこのオツサンツッ!!?』

「つて、そうじや無くてさ!助けてくれよオツサン!アツチの方は武器持つたオツサンが何かと俺を狙つて来てよお。毎日死ぬ思いだつたんだ!どうか一晩だけでも止めて来れねえかな?」

「俺はお前を襲つてねえ!人聞きのワリイ事言つてんじやねえよ!」

「ああああああオツサン違いいいい!!』

俺が最初にボケ入れたせいで話が進まねえ!?

「そ、そうじやなくてだな、アツチにいる浮浪者共に毎日襲われてな、アツチじやまともにコミュニケーション図れなくてだな、こころ辺に来てから初めて会つたマトモな人つてのがオツサンな訳だよ。どうか面目目に聞いて来れねえかな?」

「毎日穴を遊ばれてたのか:アツチの連中は今がそれがブームなのか?そりや災難だつたな。」

「もうソレでいいから」

いや俺がその流れにしたのが悪いんだけどな。このオツサンにボケかましてスイツチ押すのは辞めとこう。

「それで、如何にかして家に帰りたいんだけどよ。今日はもう遅いからさ、泊めて欲しいなとか思つてるんだけど。」

やべえ、さつきの流れで面目な頼み方が出来ねえ。これは断られるか?

「いいぞ」

断られなかつた。よかつた。

「どうやら悪い奴じや無さそだからな。泊めてやる。だが自分のボケで始まつた流れを萎えて無理矢理止めたのは頂けねえ。だから一晩だけだ。その間に此処のことも説明してやる。生きていく様にな。朝になつたらとつと出てけよ。」

そう言つてオツサンは背を向け歩き出した。そんなにボケ倒したかつたのかこのオツサン。まあ泊めてくれるつて言つてんだから有難くお邪魔しようか。

「あ、ありがとうなオツサン。ついでに電話とか貸してもらえねえか

な。仕事先に詫び入れたくてさ。それと…」

「お前、コツチに来てから何日経つてる?」

「…」

三日間と少し。この時間、野宿時以外はずっと彷徨い続けた。

「その様子だともう勘づいてるとは思うが、ハツキリさせないまま
じやいけねえからな。…だから」

オツサンは足を止め、体ごと振り替える。

「ハツキリ言つとく。お前はもう死んでいる」

そう言つて、オツサンはまた背を向け歩き出す。

：分かつてるよ。さつきまで考えてたタイムスリップだとかテレビがどうとか、それがバカ真面目な現実逃避だつて。女子高生を助けてトラックに轢かれて、そんなカツコ良く死んだ記憶が本物だつてことぐらい。俺はこの三日間と少し、現実逃避に必死だつたんだ。

「…なあオツサン。生前はケ○シロウつて名前だつたりしない?」

「いや、俺はコツチに来てからの…このソウルソサエティに来てから
の記憶しか無い。」

「…へ?」

ソウル ソサエ テイ? 何それ美味しいの?

「ソウルソサエティ、それがこの死後の世界の名前さ。お前こつちに
来てから飲まず食わずにしねえか?」
あ。

「気づかなかつたんだろう? 本来は習慣だつたり食欲だつたりが食を
思い出すトリガーナ訳だが、肉体が無くなつて習慣が極薄になり、魂
だけになつた体は食欲が湧かねえ。故に食そのものが指摘されるま
で忘却されてた訳だ。」

…じゃあ、マジなの?

「あるいは靈力つつーものを身に付けると話は違つてくるんだがな
マジなのか…?!

「まあそれでも喉は渴くんだ。肉体がある時よりはマシだと思うが。
お前はさんもどうせ盗みか何かやつて喉を潤してたんだろ?」

「いや、コツチに来てから何にも飲んでない。気づいたら喉カラカラ

だわ。」

「（乾いた喉から出る声じやねえと思うが…）」

「そんなことよりオツサン。夜になると遠くからバケモンの呻き声見たいの聞こえるんだが」

これは嘘だ。とある確信を持つ為の。

「ああ、そいつは虚だな。俺たちと同じ靈体だが、そいつらは…」

その後もオツサンの説明は続いていたが全く耳に入つてこなかつた。たつた一つの事実のみが頭の中を支配していた。

B L E A C H の世界に転生したってことなのか…ツ!??

斬魄刀、鬼道、始解、卍解。これらが自在に操れる世界に転生した。あの世に来たのに転生とはこれ如何に。ともかくその事実に俺は打ち震えた。その場で狂喜乱舞したい。そんな衝動に駆られた。が…：

「あれ…」

「おつと…」

オツサンは躊躇なく俺に気づくと直ぐに振り返り、俺の身を抱きとめた。そのまま背中に俺を乗せた。

「相当無理してたんだろう。今は俺の背中で休むといい。」

「オツサン…（トゥンク）

いやトゥンクじゃなくて。そんなに疲れてた自覚はないんだがな。まあオツサンに会うまでもめちゃくちゃ緊迫した状況が続いてたし、こういう事もあるか。大人しく休ませ…：

「…オツサン。俺、腹も減らないし喉も乾かないんだけど。」

「あ？ そうだな。さつきも言つたが靈体はみんなそうなんだよ。靈力持ちをを除いてな」

「…」

う、うそだろ…つ

靈力が無エ!!?」

餅、美味かつたぜ

道中、オツサンからいろんな事を聞いた。俺たちは整と呼ばれる事。虚なる存在の事。それらを管理する連中、死神。護廷十三隊。俺が持つて原作知識とそつ変わりなかつた。これマジで転生してることだよな。信じていいんだよな。オラすげえワクワクしてきたゾ。だが肝心なことに俺には靈力が無いっぽい。腹減つてねえし。どげんかして靈力手に入れなイカン。

オツサンの背にて揺られること十分。森に入り坂を登り、速度を落とす事なくオツサンの家まで辿り着いた。森暮らしなだけあつて滅茶苦茶体力あるなこのオツサン。家の前で下ろしてもらうと、オツサンは家の中へではなく、その隣の物置小屋に向かつた。

「寝とつてもよかつたんだぞ。」

「いや、起きてからそう時間経つてねえんだ。ガタは来てるが休眠モードに入るにはもうちつとエネルギーを発散しねえと。」

ちよつとテンション上がつて寝てる気分じや無えつてだけだが。「まるで機械みてえだな…ほれっ」

そう言つてオツサンは斧を手渡してきた。

「？ なあ、これ」

「エネルギーを発散するんだろ？薪割りを手伝え。」

そう言つてオツサンは薪を取り出し、切り株の上に乗せる。

「…まあ、ちようどいいか。」

泊めてもらうわけだしな。何かしら手伝うのは道理だ。セットされた薪へ狙いを定め、斧を振り上げ、落とす。

スパンツ！ カラカラア

薪が綺麗に真つ二つ。

「どうよ？」

「すまんな。先に説明しなかつた俺のミスだ。」

なつてねえつてこと？傷つくわあ。

オツサンは新しい薪をセットする。

「まずは少しだけ刃を薪に食い込ませるんだ。斧に固定してから一緒

に持ち上げて切り株に叩きつけろ。」

言われた通りに斧と薪を一体にし、持ち上げ振り落とす。

「antan!カラカラア

「こんな感じか?」

「そんなに力は入無くていい。全部割るまで体力持たねえぞ。もつとコンパクトに…」

「へいへい。」

カンツカラカラア

カンツカラカラア

しばらく、薪の割れる音と転がる音のみが、断続的に広場一体に響く。

「…なあ。オツサン」

「ん?」

「靈力ってのは何なんだ?」

これからオツサンと会話する上で、原作知識がモロに出ると「何でそんなこと知ってるんだ?」つてことに成りかねないので、先に質問責めで基本的な知識をゲロらせることで話しやすくすることにした。「靈力ってなんだつて…漠然としてて答えらんねえよ。何が聞きたい?」

「靈力ってのはどうやって手に入れられんだ?」

あと原作にも出てない情報が欲しいから。胸に刃突き立てながら自己紹介するとか以外でなんか無い?

「…さあな。素養が無えとめつちや難しいって話だが。手に入れてどうする。」

「そりやもちろん、死神になるんだよ。それで給料もらつて、美味しい飯食つて、ゴロゴロして、自堕落な生活送るんだ。」

チートな斬魄刀貰つて斬拳走鬼シコタマ鍛えて藍染とかYHVHとか無双してモテるんだよ。

「美味しい飯はともかく、ゴロゴロなんて出来ねえよ。ヒラは遠方に出向いて虚をバツタバツタと切つてる時間が圧倒的に多いんだ。上位の席官にでもなればちつとはズルできるかも知れねえが、大きな

案件には上位の席官が駆り出される。死亡率が爆上がりよ。止めとけ止めとけ。」

めつちや某同僚並に止められる。俺の正体全部分かつてたりしない?

「流魂街は全部が全部田舎なんだろ? 酷い所は殺しなんてしょっちゅう。そんな所で何百年も暮らしてらんねえよ。」

「はつ、若いねえ。」

カンツ カラカラア

「もう薪は十分だ」

「そうか?」

オツサンは薪をそそきと集めると、家の側にある薪置き場に割った薪を置くと、予め更に割られた薪を持って家の中へ入った。オツサンの後を追つて、斧を家の横に立てかけて中に入つた。オツサンは上から吊るされた、予め具を入れた鍋の下に、細かく切られた薪を置き火を入れた。

⋮今どうやつて火を付けた?

「オ、オツサンつて⋮」

「座れ。今日は鍋だ。」

言われた通りに座る。

「⋮テツキリ風呂に使うもんだと」

「誰もそんなこと言つてねえけどな。」

「オツサンつて死神だつたんだ。」

「死神? 霊力の扱い方を多少心得てるだけだ。」

「じやああの立て掛けてある刀は何だよ。」

目立つところに刀は置いてあつた。あれつて斬魄刀だよな? これで隠す気あつたんだろうか。

「⋮」

「何で隠すんだよ。別にいいじやねえか。減るもんじやねえし。」

「俺はオメエに靈力の扱い方なんて教えねえぞ。」

「!/?」

心読まれた!?

「まだ頼んでねえし…。てか、何でそんなに死神から遠ざけようとするんだよ。供給が有り余つてんのか？」

「オメエの様な甘ちゃんには務まらねえのさ。」

頑固ジジイみたいな事言い出した…。

「まあ、俺にオメエの人生をどうこうする権利なんぞねえからよ。勝手に靈力身につけて勝手に死神になれば良いさ。」

「せめて靈力の得方とかでもよお。」

「靈力の得方ねえ。そつちの方はマジで知らねえな。俺の場合は急に腹減つて倒れてな。理由もさっぱりだ。のんびり待つしか無えんじやねえか？」

「…そつかあ。」

「こういうのつて転生特典とかで直ぐに身についてるもんじやねえのか？初っ端から上手く行かねえことばかりだ。」

「死神になつても、あんまり良いこと無えぞ。」

「オツサンつて死神業嫌いなのか？」

「そう言うわけじや無えけどよ。仲間が死んだ時なんてスゲエ悲しいぞ？。遺族に罵られる事もある。お前たちが不甲斐ないからだあ！！？つつってな。」

「やめろよそうやつて脅すの！」

「脅しじやねえよ。忠告だよ。先人としての。」

酒飲んでるわけでもねえのにタチ悪いな。

「そういうえば、何でおつさんこんな所に居るんだ？休暇か？」

「いや、ここ74地区はよく虚が出るんだ。そこで数人死神が常駐して、出たら狩るのが俺の仕事だ。だから此処にいる。さつきも見回りのために外に出てたんだ。」

「…それつて、79地区よりも危険なんじやねえのか？」

「いいや、俺たちが居るから比較的こつちの方が安全だ。」

「いや、あんた等居なかつたら確実にこつちの方が危ねえって事じやねえか！」

そこからオツサンには色んな話を聞いた。主に流魂街についての事を。1地区が一番治安がいいからそこを目指すといい事。そこに

は死神が瀧靈廷への出入り口を門番していて、そいつに聞けば靈力の会得方法を知つてゐるかも知れない事。なぜここまでしてくれるのでか。会話から伝わるお人好しさが答えるだろうか。本人には聞かないし、言わないが。食つたらさっさと寝ることにした。オツサンはまだ起きてそこ等へんを哨戒するらしい。疲れていたので、床についてから数分もしないうちに深い眠りについた。

「こつから先に進むと、町が見える。30日ぐらい町の中を突つ切つていくと、明らかにこつち側の雰囲気とは合わねえ、金の掛かつてそな頑丈なタイルと塀のある空間に突き当たる筈だ。昨日も言つたが、その中には絶対に入るなよ？殺されるぞ。」

日が明けてすぐに叩き起こされ、締め出されるやいなや、そんな事を言われた。もう行けってか。

「そつから瀧靈廷との境界を右手に半日進んでいけば1地区だ。看板とか無えからちよくちよく住人に確認取れよ。」

「つて事は、30日と半日か。」

「いや、数時間と半日だ。」「え？」

「おぶつてつてやるよ。」

まじ？オツサンたち悪かつたり超絶優しかつたり、ギャップ作りの天才かよ。惚れるぞ。

「一緒に行くのか？任務は？」

「今日で任期だ。」

まあ、有難いんだけどさ、そう言うことは昨日言えなかつたのか？
「つて言うか、それなら最初の説明要らなかつただろ。」

「いや、俺のおかげで移動時間が30日縮むんだぞつて事を顕著にしだくてな。」

「恩着せがましいわ！…でも恩にきるわ。」「おう。」

昨日と同じようにオツサンの後ろに乗らせてもらう。あ臭。

「スピード出すから、しつかり掴まれよ。」

瞬歩つて奴か。そう思つた瞬間、オツサンは一気に加速した。

「うおおおおお!?」

あつという間に街に入り、人と建物がものすごい速度で流れいく。

速えええ!? ちよ、速度落として！ 落ちたら死ぬう!?

だが、口を開いて声を出そうにも入つてくる空気のせいでえおえおえーしか発声出来ず、瀬靈廷に着くまでの間、小汚いオツサンに落ちないようにしがみつくことしか出来なかつた。暫く揺られていると、あつという間に瀬靈廷との境界に着いた。

もう着いたのか。30日の距離を数時間か。早く着いたのは良いことだ。良いことだが…。

「ゼエ…ゼエ…」

「何で走つた俺より疲れてるんだ?」

「アンタなあ…少しばは乗客の事考えて運転しろよ!」

「…無銭なんだからありがたく思え。」

オツサンはブイッとそっぽを向いた。

いやオツサンがそれやつても全然来ねえしキモいだけだぞ。

「じゃ、此処でお別れだな。」

「いろいろサンキューな、オツサン。」

色々あつたがこのオツサンに会つたお陰で先が明るくなつた。ちゃんと礼を言わんとな。

「いいつて事よ。じゃあな。」

さて、俺も向かいますか。…

「おい、オツサン！」

「んお、何だ?」

オツサンは瞬歩を使う直前に呼び止められ、戸惑いながらもこちらに反応を示した。

「オツサンの名前、聞いてなかつたなと思つてよ。」

「…そういうえば、互いに自己紹介して無かつたな。俺の名前は千野大吾だ。まあ、もう会うことは無えだらうが。」

千野大吾、ね。

「何言つてんだ。俺は獅子村台藏だ。将来有望な後輩の名前だからよ。しつかり覚えとけよ！」

「へ、期待しねえで待つてるぜ。今度こそ、じやあな。」

そう言つて、オツサン、千野のオツサンは瞬歩を使って今度こそ瀧靈廷の向こうへ行つた。

この世界は殺伐としている。79地区では道を歩けば直ぐにリアル鬼ごっこ。側を見れば死んだように横たわるホームレス。或いは本当に死んでる者が多数派なのか。だから隅で蹲つてやり過ごす作戦が通用した。死体だと思われて。そんな79地区とは違つて、瀧靈廷に接する、今歩いてる地区は段違いに平穏で活気のある様子だ。街歩く人々は仕事に精を出す人だつたり、のんびり散歩する人、親子、或いは恋人と仲睦まじく歩く二人。見ていてこつちまで幸せが伝わつてくる様な、そんな人々で溢れていた。でも恋人はもちつと日陰に歩いてくんねえかな。未来に不幸に遭うのを示すように。

そんな街を数時間歩き、夕暮れ時の時刻。

「すんませーん。」

「どうした若えの。」

「此処つて潤林安で合つてますかね。」

「ああ、合つてるが……最近コツチに来たのか？」

「ええまあ。ついでに丹坊さんつて死神の住所とか教えて貰えませんかね？」

「……丹坊さんなら、今日は流魂街にいないよ。」

「へ？ あ、ちょっと……。」

話しかけた男はそそくさと何処かへ行つた。

：怪しまれたかな？ まあいいや、のんびり探すか。取り敢えず今日はもう日が沈むし、野宿する場所を探すのが先か。

捜索は明日にし、寝床を探すことに決め、そこらの裏路地へ足を進めた。朝まで安全に寝込むには、同じ様に野宿する奴らの側に場所を決めるのが、三日間の逃亡で得た知見だ。それに倣つて、野宿する奴

らを探すのに裏路地を右へ左へ蛇行し進もうにも、目当ての連中が一向に姿を見せない。1地区は流魂街の中では一番安全な場所らしい。そんな街の道路にホームレスが転がつてないって事があるのだろうか。東京にはホームレスや酔い潰れる連中までが地べたに寝転んでると言うのに。

暫く進むと、何やら騒がしい喧騒が聞こえる。

興味本位に向かい顔を覗かせると…

「やめろやあつーこの変態があつ!? フンッ！」

「ダ!? オ、大人しくしろやこのガキあ!!?」

「その綺麗な顔腫らしたるぞこらあ!!」

イタイケな幼女とその子を縄や布でグルグル巻きにせんとする怪しげな二人組との戦闘、もとい誘拐現場を見た。

ええーっ：

どう言う事や!? 全然平和やあらへんやん！ 千野のオツサン！ しかも夜更けに人気のない所で幼女誘拐だぞ!? 78地区のチンパン共よりよつぽどタチ悪いよ！ 人の所業にクラスアップしてるもんよ！ 「さわんじやないよこんのブサイクがあ!? 誰かあああ!!」

「ブベツ！ 大人しつブホツ！ 足蹴りをやめろお！」

勝てそう。そう適当に思つた束の間、少女が後頭部を掴まれ、顔面を地面に叩き込まれた。

髪を引っ張り持ち上げ、顔面にストレート。相方は助走をつけ腹に渾身の蹴りを喰らわし、

「…あつ…」

計3回の攻撃で少女の戦意は頃垂れ、声にもならない音を発した。

⋮

どうやつてあの二人を倒すか。そんな身の程知らずなことを考えた。誘拐犯共の腕や足は、はち切れんばかりに太く、とても重そうだ。あんなので暴行されたらひと溜まりもない。あの少女が身を持つて表したではないか。俺は格闘技も護身術も知らない。良いようボコボコにされて道端に転がるだけだ。だから後ろを向け。振り返つて裏路地を出るんだ。

そう、自分に問いかける。しかし、この足は動かない。

「た、助け…」

意識が朦朧とする少女と目が合う。少女がこちらに向け口を開くが、何を言つたかは聞こえない程声量が小さかつた。だが確かに伝わつた。少女は助けを求めている。

あの少女の顔を見たか？勝ちきそうな可愛い顔が腫れと恐怖で歪んでる。きっと将来美人さんに育つであろう少女の顔を、未来を、大人の欲に塗れた勝手な都合が絶望に染めようとしてるんだ。こんな間違つてる。そんなのを止めない何て男として恥ずかしいだろ？前に出るんだ。

心の慟哭が耳に届く。

俺はそれに従つて、屈強な男達へ一步を踏み出し…
「…」

やめよう。

俺は踵を返し、その場から離れんと歩き出す。

一体何を考えてるんだ。こうやつて英雄願望働かせたから俺は死んだんじやなかつたのか？この声を聞いたから判断が遅れたんじやなかつたのか？79地区で散々思い知つただろ？そこには殺し合いや惨殺を楽しむ連中だけじやない。孤独な奴に憔悴した奴、道端に行き倒れる奴。俺はその悉くを無視して此処にいる。そいつ等は無視して、見た目がいい少女は助ける？そんな差別こそ間違つてる。それにこんな血迷つた行動を取つて一体何になる？あんな地も涙もない連中に挑んだら確実に死ぬぞ？一回目はマジカルな世界に転生するとか言う奇跡体験が起きた。じゃあ2回目は？2度も奇跡が起きるわけがない。今度こそ本当の死だ。

現場から離れる足は速度を上げる。

もう俺に呼びかけないでくれ。俺はこの世界で面白い可笑しく暮らすんだ。今はまだ靈力もないけど、いつか死神になつて、それで：斬魄刀を持つて、

……この愚か者が。

「ああ？ 何だテメエ。」

「何でも良いだろがよ。」

たとえ、俺の斬魄刀がチートとかで、軌道や走術にも才能があつて、藍染とかY H V Hとか瞬殺出来る程の力を持つたとして：心を塞いだままで楽しく転生ライフを過ごせねえだろ？

「死にてえのかこのヒヨロヒヨロがよ。」

「おい、あんま時間かけてらんねえぞ。」

「ほーん、時間掛けてらんないとな？」

いやー、転生ショックで頭どうかしてたわ。英雄願望？ どうせ死ぬ？ 差別？ 面白可笑しく暮らす？ 馬鹿じやねえの。馬鹿すぎてイマジナリーブラックホールに罵られる始末だ。

目の前のこいつ等の所業、少女の助けを求める顔。全部網膜に焼き付いちまつたんだ。その時点で全身突っ込んでるも同義なんだよ。知らねえフリ何てあり得ねえ。そんな事したら、マジで斬魄刀にあつた時に笑われるだろうな。何より俺が笑う。笑って責めるだろうよ。「ガキを守つて英雄気取りか？ わらわせる。」

「いいや、守るのは少女じゃねえ。」

「あ？」

「テメエ等、よくも俺を巻き込んでくれたな。」

「…テメエが勝手に首突っ込んできただnjやねえか。頭沸いてんのか？」

そう、これは少女を守るための戦いじゃない。目の前のイケ好かねえ連中ぶつ倒して、気持ち良く寝るための戦いだ。汚ねえ地面で、風通しの良いクソ環境で寝入つても、明日の朝、気持ち良い朝日を浴びて目覚める為の。

「巻き込んだ責任、取つてもらうぜ。」

俺の魂に陰を生む所業は見過せねえ!!?

そう、覚悟を決めた瞬間、

体の内側から、どつと何かが噴き出す感覚に襲われた。

同時に、足に込めた力を解き放ち、全力で駆け出した。

これなら、いける！

そう、確信を持った。

「うおおおおおおおお!!」

思いつきり助走を付け、誘拐犯の一人に殴りかかる。

「フンッ！」

「フゴッ!?」

渾身の一撃は見事に避けられ、カウンターを腹に喰らつた。

「フツ！」

「オラアツ！」

「アブツ！ブベツ!?!?」

腹を抱えて倒れると、暴君のもう一人も加わり袋叩きが秒で始まった。

「ちよ、ちよつと待つてえええ!!!!???

あれええええ?!俺弱すぎだろおおおおお!!!!??!

「んだこいつ、マジで薬でもやつてんじゃねえか?!?!

「こんなのでどうやつてガキ助けようつてんだか。 フンッ！フンッ！』

「グヘエツ！ちよ、助けてええええええ誰かあああああ!!!!???

数々の葛藤を乗り越え、満を辞して誘拐犯二人に挑み始まつた戦いは、物の見事に防戦一方のまま、戦況が覆ることは無く。俺はそのままタコ殴りにされ、意識が途絶えた。

「おい、テメエ等。」

「お、おめえ等元楼の所の……！」

そんな会話を耳に入れながら。

「んあ……」

「おお、起きたかい。」

…知らない天井と布団と婆さんと etc。

「いてて、」

起きあがろうとすると全身に痛みが走る。顔も触ればパンパンに腫れている。

「動かん方がええ。」

「婆さん、ここは…」

「元楼。单なる餅屋さね。」

「は、はあ」

「覚えてないんかえ？うちの娘を攫う不届きな連中を足止めしてくれたそうさね。」

「ああ…、足止めってか、二人とも薙ぎ倒す氣で向かつて無様に返り討ちにあつたが正解なんだが…。つてか、

「その、うちの娘つてのは？」

「孫さね。アンタが時間を稼いでくれたおかげで、うちの若いもんが間に合うことことができた。感謝するよ。」

「助かったのか。そりやよかつた。」

「まあそういうことでいいか。」

「喉乾いたろう？お茶持つてくるよ。」

「ああ、サンキュー…」

ぐううううううう

「餅も持つてくるさね。」

「はははつ、いやー何から何まで…」

⋮

うおおおおお腹減つてるうううううう

「婆さん!!!」

「うお!?な、何だい。」

「俺、腹減つてるよ！靈力が身についたんだ！」

「い、いつの間に！」

「…腹が減るのは初めてかい？良いから寝てな。立つと全身痛むだろ

う？」

「え？…うおおおお!!!???

!?!?!!?!!?!!??

全身痛えええええ
!!!!???

? ! ? ?

勢いで立つたのか、音そくさと寝床に潜り、痛みが引くまで悶えた。その間にお茶と餅を取りに行つた婆さんが戻ってきた。

「痛みは引いたかい？」

卷之三

靈力が身についた喜びは 全身打撲の痛みに虚しく消沈した。ゆづくりと体を起こし、お茶に口を付けた。

卷之三

「河での娘は豐つ

「さあね。今頃不埒物の拷問の冒

ら金になるとと思つたじやないかい?」
は?

それが世界一可愛いからが、そりやしこうがれが】

な。
」

「先に冗談言つたのそつちだろ!?」

このババア…。

「アンタが居なかつたら、本当にあの娘がどうなつてたか分からなかつた。改めて礼を言うよ。」

いいって、俺の都合で勝手に首突っ込んだだけさ。」

「されば借りてことにしどぐせね
から、いつでも戸を叩くといいよ。」

おこど
これはチャンスか?

「娘はやんないよ。」

「いやねえ。俺をここで働かしてくれ。」

「今の住居はどうするのさ。」

「そもそもそんなの無えよ。死神になりたくつてよ。でも靈力が無いから、団丹坊つて死神なら靈力の会得方法とか知らねえかなつて。」

「それでこつちに来たわけかい。でも丹坊さんの下へ行く予定は無くなつたようだね。」

「ああ。何でか知らねえけど、靈力はこの通り手に入れたから、あとは真央靈術院の入学試験までの時間と、食い扶持をどうにかする必要がある。」

「それでここで働かせろつかい？まあ、入試なら大体半年後だし、丁度人手不足気味だつたから、べつにいいよ。半年間、ここに…」

「？」

「もしや、長期的にこの店に住むことで娘と仲良くなる算段かい？」

「餅、美味かつたぜ。」

就職が決まつたところでボケの一切を無視し寝込むことに決めた。